

かささぎ通信 第147号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 5月 9日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年4月の「森三郎の作品を読む会」では、
「をみなへし」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943年12月)
「五年のころ」(『赤い鳥』1933年12月号)を読みました。

「をみなへし」は『雪こんこんお寺の柿の木』全二十作の内、第十八番目の作品です。「をみなへし」と聞くと、『万葉集』山上憶良の秋の七草の歌「萩の花 尾花葛花などしこの花 をみなへし また藤袴朝顔の花」が浮かんできます。この作品の中で野辺のをみなへしは、ただの点景ではなく、少年の理解の届かない世界の入り口に置かれた重要な役目を果たしていました。

好一の叔父さんは東大の国文科の学生です。叔父さんはお父さんの弟で、もう両親(好一の祖父母)を亡くしていましたが、長い休暇には好一の家に帰ってきました。今年は帰省しないと云っていた叔父さんが、夏休みも半ばを過ぎたころ帰ってきて、好一の採ってきたをみなへしなど秋の花を持って一人で墓参りに出かけました。好一もその後から行くと、叔父さんは自分の家のお墓参りをした後、だれか知らない人のお墓に花を供えてたはずでいました。好一は叔父さんの邪魔をしてはいけないうな気がしてその場を去ります。いつもとは違って顔色の良くなかった叔父さんは、それから三日もすると東京に戻りました。好一は叔父さんに次の帰省の時には本を買ってきて頼みます。しばらくして危篤の知らせが来て、叔父さんは白い布に包まれた箱の中に入って帰ってきました。先日の三日間の帰省は、病気の進行を皆に黙ったままお別れにきたのでしよう。その後まるで冥土からでも届いたように、叔父さんから好一に宛てた童話の本が届きます。ついこの間「夕日とひぐらしの雨と、墓場だけのもつあの匂ひとの中にどつととして」いた叔父さんはどこに立ってひぐらしの声を聞いているのだろうかと思うのでした。

主人公の心情にひぐらしの声を重ねるのは森三郎が好んで使う描写です。秘密めいたあのお墓の主と叔父さんとはどんな関係かは分かり

ません。しかし何だか伊藤佐千夫の『野菊の墓』に似た世界を想像してしまうような抑えた描写に、会の当日も皆、引き込まれるような感じでした。ところがこの話はここで終わりませんでした。その後、好一はをみなへしやをとこへし、かるかや、われもこうをもつて叔父さんのお墓をお参りしました。そして先日叔父さんが立っていたお墓に回って花筒にをみなへしを一本さすと、ふいに好一はふるえ上がりました。お墓の中から得体のしれないその人が出て来て引きずり込まれそうな気がしてあわてて墓地を出ました。叔父さんの心の秘密に安易に立ちこもうとしたことを拒絶されたのでしょうか。ここまで読むと、この作品が大人になる前の子どもの世界を描いていることに納得します。好一は「昼日中あんなに怖い思ひをしたのははじめてでした」と述懐します。きつと読者の子どもたちも同じ思いをしたことでしょう。この作品には森三郎の実体験やこれまでの作品の構成と重なることも多く出ています。作品中の叔父さんと同じように、すぐ上の兄と姉とを若い時に病気で亡くしていました。不思議な力を持ったトランプの女王に引き込まれそうになった話もありました(「うんすんがるた」『赤い鳥』1933)。東京にいる上の兄・銚三から「世界童話集」シリーズ『星の女』や雑誌『赤い鳥』等を送ってもらっていました。東京の叔父さんが新しい文化を運んでくれる憧れの存在だったことは「ひとりっ子」(『赤い鳥』1933)にも出ています。三郎にとって銚三はまさに憧れの存在だったはずで

す。次の作品「五年のころ」は「大葉しげ子」の名前で書かれた童話です。何でも一緒に行動する仲良しのグループを作ったがるこの年ごろの女の子の様子をよく捉えています。三郎さんはどうして女子の気持ちがこんなに書けるのだろうかという感想が出ました。三重吉も「あの年代の少女の気持の動きを、自然のままよくゑがいた」と褒めています。

〈次回予定〉2025年6月13日(金)午後一時半~三時半

「沼」(『赤い鳥』1934・1)

「村の床屋」(『雪こんこんお寺の柿の木』1943・12)